

東南アジアにおけるイスラム受容の背景

中原道子

一、イスラムの特性——在家の宗教——

イスラムはよく『砂漠の宗教』と表現されるが、むしろその性格はより都市的である。イスラムを都市生活者の宗教であると論じた宗教学者もいる。⁽¹⁾イスラムの創始者ムハンマド(マホメット)自身メッカの出身であるが、メッカは砂漠の中の、農業が全く不可能な都市であり、その生存を完全に商業にたよっていた。ムハンマド自身都市に居住する商人階級に属していたのである。イスラムの発展にともなってその版図は拡大するがイスラムの浸透は都市から周辺へというパターンをとった。そしてその過程でイスラム世界の中に農耕社会が取り込まれてくるのである。イスラムが拡大する時代のイスラムの版図は、例外(後にベンガル、インドネシア、マレー半島、フィリピン、雲南等が含まれる)はある

がその境界は乾燥・亜乾燥地帯の境界とほぼ一致することからもイスラムが定着農耕社会の宗教ではなかったことは明らかである。ムスリム(イスラム教徒)の宗教的義務としてメッカへの巡礼があるがこれもイスラムが商人の宗教で移動することに対して拒絶反応がないからだといわれている。元来、メッカにはイスラム誕生以前からカーバの神殿があり、一定の期間に各地から巡礼の人がメッカに集まり、その期間、ここは交易のための市で賑わったのである。現在に至るまでこのメッカへの巡礼は行われており、この行為はイスラム世界に全地球的なスケールでの交通網を発達させた。

イスラムのもう一つの特徴は、それがいわば在家の宗教であるという点であろう。つまりイスラムには特権的な祭司階級がないということである。

ムハンマドが在世中にはムスリムの共同体ウンマ (Ummah) を導いたのは神であり、神はムハンマドを通してウンマが直面するさまざまな問題に対して指示を与えて来た。この指示に従ったムハンマドの言行がスンナ (Sunnah) とよばれる範例で、それは宗教的な問題、例えば神、来世、巡礼、喜捨、礼拝、断食等からムスリムが日常直面する世俗的な問題、例えば婚姻、離婚、売買、相続、裁判等に至るまであらゆるものを含んでいる。ムスリムにとっては神の啓示であるコーランとムハンマドのスンナが最も重要な生きるための指針であり、コーランとスンナからさらに体系化されたイスラム法 (Shari'ah) がつくられるのである。

一人一人のムスリムが来世において救済を得られるか否かは、一人一人の信仰と行いによるのであって、それは完全に神とその人の間の問題である。他者の救済に関与することのできる聖職者は存在しない。したがってイスラムにはいかなる特別な祭司階級も存在せず、徹底した在家主義をとっているのである。

祭司階級に近いものとしてはウラマー (Ulama) 集団、すなわち学者の集団が存在し、教義やイスラム法等についての専門的な知識を持ち、時代の推移とともに起こって来る宗教上の問題について、コーランやスンナにもとづいて解釈を示す。しかし、この解釈は何ら絶対性を持ってムスリムを束縛するものではなく、それを受け入れるか否かはムスリム各自の自由である。

ここにあげたイスラムの持つ性格の中に、インド、東南アジア

という本来のイスラム世界と質を異にする世界への伝播の鍵がある。イスラムのこの地域への伝播は、十六世紀のヨーロッパのアジアへの進出以前、東と西を結ぶインド洋貿易がムスリム商人の手中にあったことと切り離すことは出来ない。ムスリム商人は航路に沿って長い旅をした。航路に沿った港市で、貿易をし、次のモンスーンを待って長い滞在をし、又ある人々はそこに定住するようになった。イスラムの伝播に職業的な宣教師は必要ではなかった。ムスリム商人の一人一人が宣教師であった。

イスラムが東南アジアで受容されるためのもう一つの要素が、イスラムがインドに入った時に付加された。ヒンドゥーとスーフィズムの影響がそれである。

二、インドに入ったイスラム

インドは歴史上数回にわたるムスリムの流入を経験している。その一つはイスラム軍の進攻、征服、イスラム政権の樹立という形をとった。しばしばインドのイスラム化について、これらのムスリム諸王の権力によるものであると論じられるが、これらムスリム支配者と被支配者であるヒンドゥー教徒たちの関係はきわめて政治的なものであって、インドにおけるイスラム政権の中心地にムスリムの人口が集中しているという事実はない。むしろ、イスラム政権がその権力をふるうこともなかったマラーバル地方に今日に至るまでインドにおけるムスリムの三分の一におよぶ人口

が分布しているという事実がある。それはもう一つのムスリムの流入の形、つまりムスリム商人の流入、定着の結果であるといえよう。⁽²⁾七世紀頃から南西インドにやって来たムスリム商人はここに定着し、結婚し、ムスリムのコミュニティを形成した。前述したように一人一人のムスリム商人は又同時に宣教師でもあったから、長い時間をかけてイスラムの伝播に大きな影響を与えることが出来た。

その後さらに歴大な数のインド人をイスラムに改宗させたのはスーフィーたちである。ことに十三世紀に、中央アジア、西アジアにおけるモンゴルの脅威を逃れて何千人ものスーフィーやイスラムの神学者がインドに流入した。⁽³⁾

ヒンドゥーは元来教条的な宗教ではない。さまざまな点でイスラムとヒンドゥーは対照的であるにもかかわらず、インドでの長い共存の年月の間この二つの宗教は交互に影響を受け合った。

例えばインドの天文学に関する著作のいくつかはアラビア語に翻訳されて紹介されている。最も有名なプラフマグプタ (Brahmagupta) の『スィッターンタ』(Siddhanta) はアル・ファザリーとヤークブ・ビン・タリクによって翻訳され紹介されている。⁽⁴⁾又、数学の分野においても同様にインド数学から多くのことを学んでいる。ヨーロッパでアラビア数字と呼ばれているものをアラブは al nūm al Hindiyah つまりインド数字とよんだのである。又、科学のみならず文学の世界でも、「アラビアン・ナ

イト」の中のシンドパッドの航海はインドの物語であるし、イスラム世界で人気のある「カリラとディムナー」はインドのパンチャタントラがペルシャ語に訳され、さらにアラビア語に訳されたものである。⁽⁵⁾

インドにおけるイスラムの浸透に重要な役割を果たしたスーフイズムはスーフイズム自身ヒンドゥー的要素を内包するようになり、そのことが後にイスラムがインドを経由して東南アジアに拡がる時に重要な意味をもつことになる。

スーフイズム (Sufism) とは八世紀から九世紀にかけて発生し、発達したイスラム神秘主義を指す。スーフイーとはアラビア語で神秘家を意味し、その語源については色々あるが、一般的に受け入れられている説によればアラビア語の『羊毛』を意味する *ʿayn* から出た言葉で、『羊毛で織った粗末な衣服をまとった者』のことで、スーフイーとはそのような粗末な衣服を身にまとい、虚飾を捨てて清貧の中に生きようとするムスリムを指したのである。彼らは神の唯一性を信じ、神への無私の愛を抱き、その愛において神との合一を求めたのである。スーフイーたちはコーランを誦し、礼拝を行い、冥想し、称名し常に神のみを思う。彼らは自分の罪を懺悔し、隠遁し、独居し、祈禱する。スーフイー達の精神的な状態はこのような最初の段階から、神の名を称え神のみに思念を集中するズィクル (Dhikr) という段階にすすみ、最後に、心を無にして神の恩寵を待つ状態に入り、ついにファナー

(Faah)に達する。一種の無我の恍惚状態で、完全に神の恩寵に
つつまれ神と一体化する。そして最後に醒めた状態にもどる。こ
のような段階を何度か繰り返し返して、スーフィーは俗世間に帰って
行く。そしてそこで一切の欲望を捨てて禁欲的な生活をおくり、
民衆に奉仕する生活に入る。このようにして理想的な境地に達し
たスーフィーを聖者 (wali) とよぶが、民衆はこうした聖者を崇
拝し、病いをいやしてもらったり、さまざまな苦しみを取り除い
てもらおう。民衆は聖者が奇蹟を行うと信じ、聖者の死後はその墓
所が崇拜の対象になる。

スーフィズムの発展の過程でキリスト教の影響とか仏教・ヒン
ドゥーの影響を説く人もいる。例えばスーフィーの瞑想とか精神
の集中は仏教徒の禅定と類似するし、又、スーフィーの倫理的自
己修養、苦行等にもヒンドゥーや仏教の影響を見る人がいる。

インドに入ったスーフィーはヒンドゥーの世界で、神の唯一性、
神の前で人間は平等であること、神への絶対の愛等を説いた。同
時にスーフィーはヒンドゥーの習慣、イデオロギーに対して謙歩
し、それを受け入れた。スーフィーやムスリム商人はヒンドゥー
の女性と結婚し、妻や子供たちをムスリムにするが、同じように
妻はヒンドゥーの生活習慣を家に持ちこんだ。ことに日常生活に
根ざすものは、結婚式、誕生式、葬式等現在でもインド、東南ア
ジアのムスリム社会においてヒンドゥーの影響が色濃く残ってい
る。

スーフィズムは唯一神信仰という強固な枠組みを持ったイスラ
ム神秘主義であるが、インドという哲学的、宗教的に豊かで寛容
な世界で、異質の知的世界に接触した。そして、それを共有しう
るだけのしなやかさを持っていたのである。

三、スマトラに入ったイスラム

東南アジアへのイスラムは勿論ムスリム商人によってもたらさ
れたものであり、ジャワにはこれら商人のものと思われるアラビ
ア語で書かれた墓碑が発見されているし、宋会要等中国の史料に
は宋代に中国に貢献した東南アジア諸国からの使臣の名を記録し
てあるが、その中に多くのムスリムの名を見出すことが出来る。
東南アジアの国々はムスリム商人を使臣として使っていたのであ
る。

東南アジアにおける最も早いイスラムの受容に関する文献は十
四世紀に書かれたとされているジャウイで書かれたマレー語の文
献 Hikayat Raja-raja Pasai (パサイ王の物語)である。ジャウ
イというのはアラビア文字を使って書かれたマレー語で、イスラ
ムが東南アジア、ことにマレー語圏(主としてスマトラ、マレー半
島等)に及ぼした最も重要な影響はマレー語にアラビア文字、ジ
ャウイという文字で表現する手段を与えたことで、十九世紀まで
のすべてのマレー語で書かれた本はこのジャウイで書かれている。
さて、前述の「パサイ王の物語」はスマトラの東北隅にあるス

ムドラ（パサイの前身）とパサイの国の王たちの伝説的な歴史物語であるが、それによると、ムハンマドは生存中にメッカの長に遺言を残し、自分の死後、東方にスムドラという都市が興るが、この都市の名前を耳にしたら直ちに船を用意し、その地を訪れ改宗させよ、と命じた。そしてメッカからスムドラに行く途中マーブリ (Ma'abri) という国があり、そこにファキールがいるから、彼をスムドラに連れて行くようにという遺言であった。

ムハンマドの死後、東方にスムドラという都市が興ったと聞かや、メッカの長は船をおくる。船長にはシャイフ・イスマイールが任命された。ムハンマドの遺言通り途中マーブリに寄りファキールを乗せてスムドラに向けて出帆する。船がスムドラに着いた時、一行を迎えた王はメラ・シル Merah Silu で、彼は夢にムハンマドを見て、コーランを讀む力を授けられていた。王メラ・シルはシャイフ・イスマイールやファキールの前でコーランの讀誦を行う。王の改宗後、そこに住む人々は改宗し、スムドラはムスリムの国になった。王メラ・シルは Malik al-Saleh と改称する。マーブリから来たファキールはイスラムを定着させるためにスムドラに残り、船は再びメッカに帰る。⁽¹⁰⁾

この伝説に出て来るムハンマドの遺言の話やメッカの長が送った船の話はスムドラのイスラムの正統性を主張し、権威づけるために創られたものであり、重要なのは、途中のマーブリで、実際にイスラムを伝え、教えたのはマーブリから来たファキールで

ある。このマーブリに関してはインドのグジャラートとする説とコロマンデルという説に分かれる。⁽¹¹⁾ グジャラート説の根拠はスムドラ（後にスムドラとパサイの二つの王国に分割される）の故地で発見されたパサイの王達の墓碑の研究からこれらの墓石がグジャラートから輸入されたものであることが解明されたことで、スムドラはパサイとグジャラートの関係が主張された。それに反対するマリソンは、最も早くイスラムを受容したスムドラの王メラ・シル (Malik al-Saleh) は一二九七年に死んでいるが、スムドラの故地で発見された墓石は十五世紀のもので、十三世紀とか十四世紀の同時代のものではなく、したがってこの墓石は十三世紀のグジャラートとの関係を何ら証明するものではなく、マーブリはマドゥラ、タンジョール等の地を指すアラビア語で広く南インドのコロマンデル沿岸を指すのに使われた言葉であると主張した。又、スマトラも南インドもシャイフイー派であるが、グジャラートはハナフイー派かシーア派であるから、スマトラのイスラムは北インド系というよりはむしろ南インドの系統であるとした。この論争はその後結論が出るに至っていない。

いずれにしても、一二九七年、最初にイスラムを受容した王 Malik al-Saleh が死ぬまでに、イスラムはそこに住む人々によって受け入れられていたと言える。マルコ・ポーロは一二九二年、フビライ・ハンの宮廷からヨーロッパに帰る途中スマトラに寄り、そこで五か月すごしたが、やはりスマトラの東北隅の Perak の

王がイスラムに帰依していることを記している⁽¹³⁾。又、一三四五年、ムスリムの大旅行家イブン・バツータがスムドラの王都を訪れている。この時、イブン・バツータはスムドラの王マリック・アル・ザーヒルに会っている。彼はスムドラの王がシャーフィー派のムスリムで、この王の庇護の下に多くのイスラムの神学者たちがスムドラに住み、学識のあるものは歓迎されていたこと、王は彼らと討論をするため質問を出し、彼らは王と自由に討論していたこと、王は金曜の礼拝のためモスクまで歩いて行ったことなどを記し、スムドラのイスラムに関して貴重な記録を残している⁽¹⁴⁾。

スムドラにパサイは十三世紀から十四世紀に東南アジアにおけるイスラムの中心になるが、十四世紀の末にマレー半島西岸に建国したマラッカの二代目の王ムガート・イスカンダル・シャーがパサイの王の娘と結婚して、この王の時代からイスラムはマラッカの王家に受容される。マラッカの建国者である初代の王パラメスワラは、明の永楽九年(一四二一年)王自ら妻子陪臣五百人余を伴って明の宮廷を訪れている。マラッカは建国して以来急激に発達した。王のイスラム改宗は、さらに多くのムスリム商人をひきつけ、マラッカは東海上貿易の中心となり、さらに東南アジアのイスラムの中心的役割を果たすのである。その地位は一五一一年にポルトガルにより滅ぼされるまで続くのである。

四、神々の中のイスラム

イスラムが入って来たマレー社会においてすでに根強く存在していたものにマレー文化があり、ヒンドゥー文化があった。しかし、前述のようにインドにおいてヒンドゥー文化の影響を受けて東南アジアに到達したイスラム、インドのスーフィーたちによってもたらされたイスラムは、すでにヒンドゥーが深く定着しているマレー社会にとって全く異質のものではなかった。現在見ることの出来る多くのヒンドゥー的習慣は誕生、結婚、葬式、王の即位式、宮廷の儀式等に依然として名残を留めている。インドではスーフィーの聖者の墓所が崇拜の対象になるが、このイスラムの一つの信仰の形は東南アジアの古くから存在するクラマツト信仰、大樹とか蟻塚とか精霊が住むと信じられる場所を信仰の対象にするクラマツト信仰という極めてアニミスティックな信仰の中に何の違和感もなくそのまま包含されてしまっているのである。

マレー社会の中で最も伝統的で固有の精神的社會を維持しているのは呪術的世界であろう。マレー社会においては呪術的能力を持つものはポモ(Donoh)又はパワン(pawang)と呼ばれ、彼らは超自然的な能力があり、超自然的な体験も持ち、人間の精神、肉体、そして物体を制御する能力を持つとされている。彼らは村落で、人々の精神的苦悩を取り除き、悪霊を追い払い、医者として肉体の苦痛をいやしてやる。十八世紀に編纂されたマレーの習慣法ではイスラムに関連する人々の地位、つまりイスラム法廷における判事とか、モスクの世話役等と並んで、こうした呪術師の

地位とか待遇とか報酬に関する規定があるが、このことは、マレー社会がイスラムを受容した後もなお、彼らが伝統的の社会において重要な役割を果たしていることを示している。

本来イスラムにとって全く異質な呪術の世界に対する一種の共存関係が作り出され、さらにイスラムを取り込むことによって自らを補強しようとした。例えば呪術の呪文をイスラムの「神の御名において」という言葉で始め、「全能の神に感謝して」という言葉でしめくくる事例も報告されている。つまり固有の信仰、ヒンドゥーの信仰、イスラムの信仰が混淆することにより、多くの人々に受容され、互いに補強しあっていると見えよう。⁽⁵⁷⁾

東南アジアにおいてはイスラムは平和に、そして個人的な形で伝わり、受け入れられてきた。それは戦争とか征服によるものでもなく、職業的な宣教師集団によるものでもなく。イスラムは、伝統的なアニミズムの世界、呪術の世界、ヒンドゥーの神々の世界に伝えられたのである。イスラムによって人々は彼らがかつて体験したことのない宗教的な一つの真理、唯一神の觀念に出会うのである。彼らはそれを彼らの唯一の信仰として受け入れた。イスラムは東南アジア全域に広がったが、インドネシア、マレーシアはイスラムを国教としている。

東南アジアにおいては、今でもイスラムとともに、ヒンドゥーやアニミズムの信仰が生き続けている。しかし重要なのは、彼らの間には純粋なイスラムに無限に近づこうという強い志向があり、

彼らにとって人生の基礎は唯一神マッラーへの信仰、イスラムだということなのである。

- (1) Planhol, Xavier de, *Le monde Islamique essai de géographie religieuse*. Paris, Presses Universitaires de France 1967
- (2) J. Edkins, *Ancient Navigation in the Indian Ocean*, JRAS, 1866 pp. 1-27. J. T. Reinard, *Relations de voyages faits par les Arabes et de les Persanes dans l'Inde et à la Chine dans le IX^e siècle*, Paris, 1845. XXXIX
- (3) Aziz Ahmad, *An Intellectual History of Islam in India*, Islamic Surveys 7 Edinburgh at the University Press, 1963
- (4) Aziz Ahmad, *Studies in Islamic Culture in the Indian Environment*, Clarendon Press, Oxford, 1964, pp. 108-118
- (5) 「ラウトン・ナー」が「カリマニト・ヴァナー」が「東洋文庫」(平凡社)所収。
- (6) Nicholson, R. A. *Studies in Islamic Mysticism*, Delhi, 1976, p. 80, 138
- (7) Fatimah, *Qudrat Allah, Saiyid, Islam comes to Malaysia*. Singapore 1963
- (8) Hikayat Raja-raja Pasai の残存するマニンスクリプトはスタンフォード・ラフマンズのために写本されたもので、Royal Asiatic Society 所蔵の Manuscript 67 に与えられるものである。英語の研究は A. H. Hill, "Hikayat Raja-raja Pasai" JMBRAS vol. 33 Pt. 2, Singapore, 1961 を参照のこと。
- (9) 夢の中でローランが読めるようになるとなる話は全くの夢物語ではない。実際に字が読めぬが女性に夢でローランの章句を見ておぼえ、口をうけて出たのを目撃したという報告もある。(報告者 Emilia Louisa Ismail 夫人、マラーヤ大学図書館員)

- (9) Hikayat Raja-raja Pasai (JMBRAS) pp.54—59, pp. 24—33
- (10) J.P. Moquet, "De Grafteenen te Pase en Grise" Tijdschrift van der Bataviasch, 1912 p.536—546 "De Eerste Vorsten van Samoedra-Pase" Report van der Oudheid Kundigen Dienst, Batavia 1913, G. E. Morrison, "The Coming of Islam to the East Indies" JMBRAS vol. XXIV, Pt. 1, pp. 28—37
- (11) 註(9)を参照。
- (12) H. Yule, "The Book of Marco Polo" London, 1871, vol II. p. 227
- (13) The Rev. Samuel Lee, The Travel of Ibn Batuta, London, 1829, p. 221.
- (14) ヲナーの歴史と開拓の歴史の参考。Endicott, K. M., An Analysis of Malay Magic, Oxford, Clarendon Pr., 1970, Skeat. w. w., Malay Magic, London, Macmillan, 1900
- (15) 佐々木達夫・高木ハジメ 東洋マニマニ 早稲田大学助教授